【資料紹介】

吉成英文氏所蔵　岡倉覚三書簡・横山大観講演録

清水　恵美子

はじめに

二〇〇七年二月、執筆者は茨城県常陸太田市の「古美術　吉成」において、吉成英文氏が所蔵する岡倉覚三書簡と横山大観講演録に接する機会に恵まれた。岡倉書簡は、催事への欠席を伝える短い文面であるが、平凡社版『岡倉天心全集』には未収録の資料であり、『五浦論叢』誌上で紹介させていただくこととした。また、横山大観の講演録は、既に一九四二年（昭和一七）に活字化され『現代』（大日本雄弁会講談社）に掲載されたものであるが、双方の記述には文体などの相違が認められるため、あわせて紹介したい。なお、資料中の漢字は原則として現行の字体を用い、変体がなはひらがなに改めてある。

①　岡倉覚三書簡

和紙、墨筆、横28cm　×　縦18.3cm

封筒なし

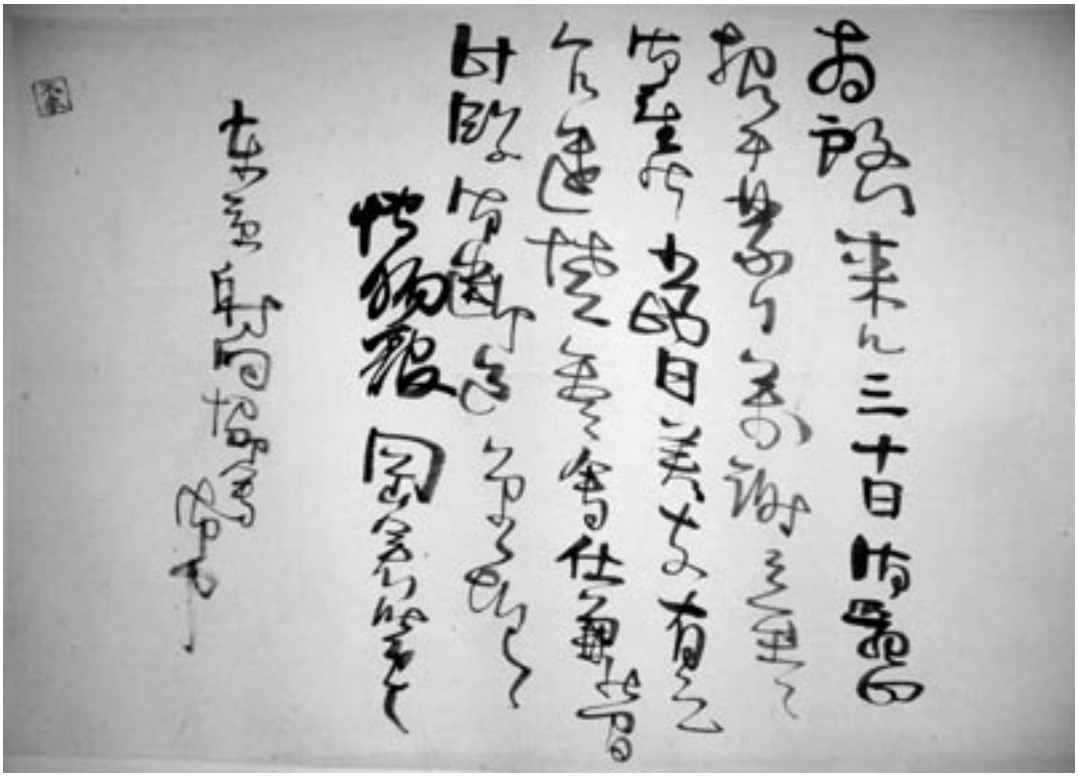
日付なし〔明治二二年六月頃〕

拝啓　来ル三十日御懇招ヲ蒙リ万謝之至ニ御座候　当日差支有之乍遺憾参会仕兼候間此段御断迄　草々頓首

博物館　岡倉覚三

東京　射的協会御中

「不参」（朱印）



解説

射的協会の催事への出欠返答で、「不参」の印は同協会によって押印されたものと考えられる。この書簡は、「川村純義宛諸家書翰　明治二二年　東京共同射的協会新築落成式出欠返答集」と題された書簡集に収録されて、市場に出たものである。[1] 日付はないが、岡倉は明治二一年（一八八八）に博物館学芸委員を命ぜられ、翌年五月一六日に帝国博物館理事および美術部長に就任しているので、それ以後に書かれたものと考えられる。東京共同射的協会は、明治二二年（一八八九）六月三〇日に新射的場の開場式を開催しており、当時の新聞に次のように記されている。

東京共同射的協会にて大森停車場脇に新築せし射的場は前号に記せし如く一昨三十日を以て開場式を行ひ来賓は清国皇族ハインリー殿下を始め貴顕紳士外国公使等無慮六百余名来会し懸賞射的放鳥射的等あり中々の盛会なりし[2]

これらのことから、この書簡は新射的場の開場式への欠席通知であり、明治二二年六月頃に書かれたものと推定できる。

岡倉と射的協会との関係は詳らかではないが、岡倉一雄の『父岡倉天心』には、銃猟に関する父の想い出が述懐されている。そこには、岡倉が東京美術学校校長時代の終わり頃から銃猟を嗜み、銃も「村田銃の三十番」から「米国製のパーカー」まで、四挺ほど持っていたことが記される。明治三一年（一八九八）の暮れには、銃を携行し、一雄と橋本雅邦の三男の秀邦を連れて小旅行に出かけたこともあった。だが岡倉の銃の腕前は「下手」だったようだ。ある日の出猟では、弁当に立ち寄った尼寺で、住持が天目の茶碗に容れて棒げた茶を受け取ると、「あなたのために、今日の殺生はやめましょう」と言って帰ったことがあったという。一雄は「彼にとっては、鉄砲を担ぐことがただぶらぶら歩きするよりも形がいいためにしたもので、獲物のごときはまったく執着がなく、またあえて多獲しようともしなかった」と回想している。[3]

②　横山大観講演録

折り本、和紙、墨筆
表紙寸法　横8.5cm　×　縦28.3cm
箱書　「天心遺績顕彰会講演録」（表）
日付なし〔昭和一七年〕

天心岡倉覺三先生　　横山大観

時勢に先立つ者、多くは世俗に容れられません、其容れられざるは、偶々先覚たるが故であります、這般の消息、物質界に精神界に、古今の感慨、何んぞ無限なると云ふべきであります。

天心岡倉先生、学博く識高く、最も能く絵画彫刻に通じ、又風雅一般造詣深く、其批評百世の後を照し、其啓蒙千古の前を闡にせらる、真に、芸術界稀世の英傑にして大先覚であられました。

曽て、天心先生余に語られて曰く「表に博愛を説き平和を唱へながら、裏にダムダム弾毒瓦斯を作り、自ら優良人種を僭称し、亜細亜民族を奴隷視し、積年に渉りて、其国土を詐取強奪しつつあるのが、英米諸国である」と、而も其後在印中、親しく英国の暴戻を目睹するに及び、遂に激発せられたる天心先生は、今より約四十一年前、仍ち日英同盟締結の二年前日露戦争の三年前、亜細亜民族の覚醒と文化的優逸について、執筆せられたのでありましたが、其激越の辞趣、時の英印政府の忌諱に触れ、遂に世に現はるるに至らず、先生仍ち再び筆硯を新にして稿を完了し、題して「東洋の理想」と謂ふ、其の冒頭に「亜細亜は一なり」と喝破し、特に日本の燦爛たる古代文化的理想につき万丈の気を吐き、英米の蒙を啓いたのでありました。先生は又在印中、釈尊成道の聖域仏陀加耶を買収せんとして抑圧せられ、或は日本と連繋して全亜細亜仏教大会を開催せんと、率先企画を進められたのでありましたが、此等総てが、時の人々の賛する処とならなかったのであります。今、イギリスの圧政と闘ふガンジイ翁、若し之を知らば、果して如何なる感慨を懐くことでありませう、然るに当時、欧米の物質文明に眩惑心酔しておりました、日本の人々に、天心先生の此等の大理想が、多く顧みられなかったのは、蓋し止む得ぬ事であり又甚だ遺憾の次第であります。而も今日米英撃滅の大詔のもと、大東亜戦争の赫々たる勝利によって、先生に対する追憶、愈々切なるものあるは、真に天心先生の大先覚たるを、示すものがあると存ずるのであります。

明治の初期、日本の芸学界は、委靡潰敗の一路を辿り、燦たる東洋精神も危殆に瀕し、古道漸く泯滅せんとせる、所謂暗黒時代でありました。先生即ち慨然として起ち、奮然として獅子吼し、高く光明を掲げて斯界の暗黒を照し、為に古美術の調査及保存の法定まり、又其卓抜なる識見に依り、従遊の徒を導き、芸術世界発生のことを為し、惹いて博く古道を興し、所謂新美術も、又漸く曙光に浴することを得たるは、是皆、先生先見の賜に他ありません。不幸にして先生事志と違い、中途にして早逝せられました為、其後の芸学界は、再び混乱状態に陥り、只時代の浪に翻弄せられつつ、遂に今日に到っておるのであります。外観は如何にも隆盛なるが如く粧はれてありますが、内容空疎なる現代芸学界は、今や、正しく強き明達なる指導者の現はれんことを希求する事、誠に急なるを覚ゆるのであります。翻って思ふに、若し明治の初期、我国の上下、官民、こぞって、欧米に心酔し、国粋を省みず、相率いて芸学を忘れたる時代に於て、天心先生の如き大先覚の、愛国的指導がなかったと致しますならば、今日の芸学界は、果して如何なる様相を呈しておった事でありましょう。思ふてここに到れば、誠に慄然たるものがあります。

今茲、大東亜戦争の下、大御稜威輝く時、皇軍神兵の健闘に依り、赫々たる戦果を収めつつありますことは、一億同胞の等しく感謝いたしおる処であります。加之も戦勝と同時に最後の勝利に向って、建設が進められつつあります時、芸学も亦文化建設の一翼を、当然担うものであります故、芸学に携はる人々は、現在を能く凝視めなくてはならないのであります。三千年の古より流れ来った祖先の血は、現在の

吾々を通じ、将来の子孫に、永遠に護られ継承されるのであります。随って、吾々に過去の文化を探求して、新しき文化を創作せんとする開発的意志がないならば、現在に求められつつある処の、日本芸術は到底生れ得ないのであります。而も此の現在に於て、我が芸学は甚しく破れ、其興るべきもの、未だ定まらざる実情に在るのであります。

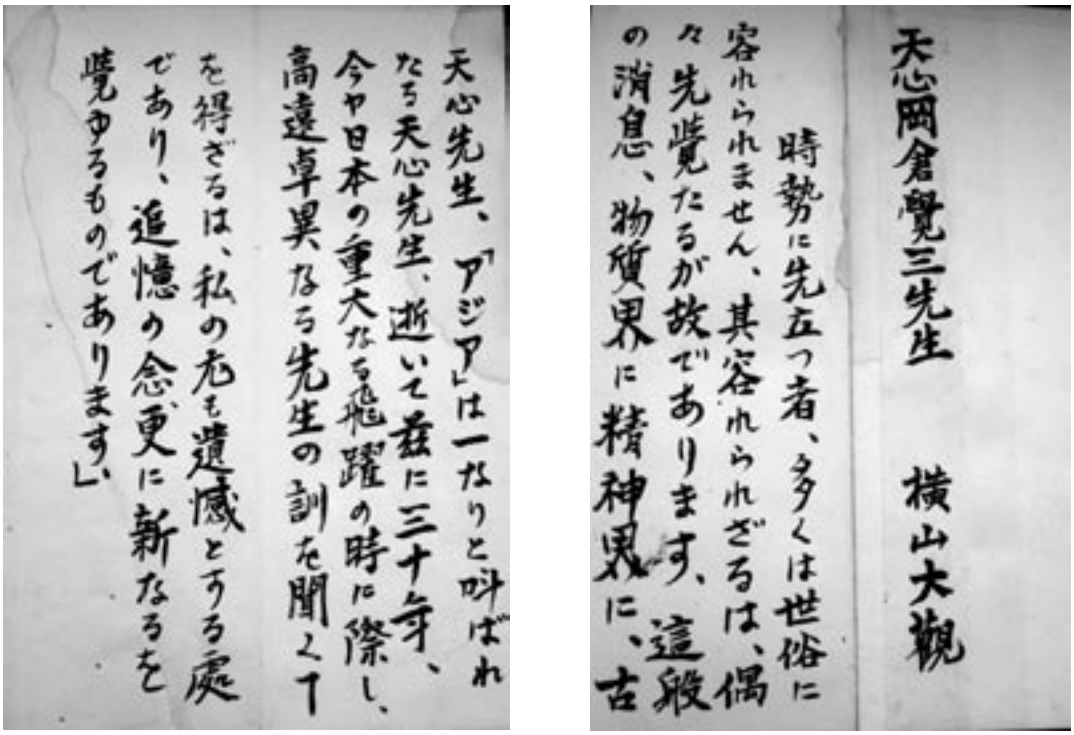
大東亜戦争下、国内の各部門は聖戦完遂の為、懸命の努力を以て、再編成せられつつあり、世界維新樹立の一路に邁進しつつあるのであります。此時に当り、作家も亦、国家の意図を自覚し、皇国日本の臣民たる本義を、実践しなくてはならないのであると存ずるのであります。然るに近年、猶一部の作家は、在来の個人主義の迷夢より醒めず、徒に工人的小技巧を弄し、遊戯的工作を以て、能事終れりとし、或は、漫然夷狄の作風を摸して得々たるが如き、道義精神の頽廃せる、卑俗なる独善的作品の横行するを見ることは、日本芸学界の誠に大いなる恥辱であると存ずるのであります。

我等は、此種作家の反省と、国家并に国民の覚醒とに依って、此等醜穢なる作品の、早急に絶滅さるることを冀い、日本芸術本来の光明を新にし、依て以て、我が芸学の振興に寄与せられんことを心から念願するものであります。凡そ、芸学に終始する人々は、常に日本の伝統を信奉し、各人が胸に抱く至純の我魂を傾到(ママ)して、崇高なる道義的芸術を創見するより他に、道はないのであります。諸君も御承知の如く、古賢の残されたる名品傑作には、皆節義の士としての気格現はれ、而も魂の躍動せる、崇き高き大乗的道義精神の流露せるを見るのであります。如此き芸術なればこそ、古今を貫いて我が人文に資する処極めて多く、精神的にも最高の糧となったのであります。如此き芸術なればこそ、我が日本が精神文化の上に於ても、世界に誇り得ることを得、その誉強兵の名に遜らざるものがあったのであります。

天心先生曰く「芸術の生命は創見にあり、百錬千磨不撓の精神にして茲に初めて光あらん。」と節義ある人格と、魂の躍動したる大乗的道義的精神に、一貫する芸術の創見せらるることに依ってこそ、大東亜の諸民族を、文化的に啓蒙することが出来るのであり、将た又、世界精神文化に君臨することが出来るのであると信ずるのであります。

新興日本に、創見さるべき新芸術の使命こそは、現代作家に課せられたる、精神文化の最も重大なる責務であります。即ちこの責務の実践こそは、芸術報国の信条であり、併せて天心先生の霊を慰むべき、唯一の道であると信ずるのであります。苟も今日、筆と刀とを執る作家諸君にして、先生を知ると知らざるとに不係、暗々裡に天心先生の恩恵に浴せられざる人はないのであります。

芸術界の偉傑にして大先覚たる天心先生、「アジア」は一なりと叫ばれたる天心先生、逝いて茲に三十年、今や日本の重大なる飛躍の時に際し、高遠卓異なる先生の訓を聞くことを得ざるは、私の尤も遺憾とする処であり、追憶の念、更に新なるを覚ゆるものであります。」


天心岡倉覺三先生　横山大觀

時勢に先立つ者、多くは世俗に容れられません、其容れられざるは、偶々先覺たるが故であります、這般の消息、物質界に精神界に、古

天心先生、「アジア」は一なりと叫ばれたる天心先生、逝いて茲に三十年、今や日本の重大なる飛躍の時に際し、高遠卓異なる先生の訓を聞くを得ざるは、私の尤も遺憾とする處であり、追憶の念更に新なるを覺ゆるものであります、」

大観講演録（一部）

解説

昭和一七年（一九四二）一〇月五日、神田の共立講堂での岡倉天心三〇周年記念講演会における横山大観の講演録である。折本の状態で紙製の箱に収められており、表書には「天心遺績顕彰会講演録」とある。横山大観記念館理事長の横山隆氏によれば、大観の自筆原稿ではなく、第三者の清書である可能性が高い。

財団法人岡倉天心遺績顕彰会（以下、遺績顕彰会）は、昭和一七年一月七日に認可された組織で、大観はその評議員、および理事長に就任した。遺績顕彰会は、第一回事業として、同年七月二日に記念館赤倉山荘及び記念碑の竣工式を挙行し、祝賀会を行った。次いで、この講演会を日本美術院、東京日日新聞とともに主催したのである。[4]

大熊敏之氏は、昭和前期の大観は、画業に従事する創作者としてではなく、「美術界で絶大な権力を振るう政治家」としての印象が強く、特に昭和一六、一七年以降、軍部の求めに応じ、戦意高揚を象徴する富岳図を多く制作したことで「軍国日本に仕える『近代御用絵師』」になった、と評する。[5] この講演録は、まさに大観が「近代御用絵師」となった頃のものであり、戦意高揚を煽るトーンに貫かれているのは、けだし当然のことであろう。

この講演の最後で、大観は、現代作家たる己れの責務は、新芸術をもって国に報いる「芸術報国」の実践にあるとし、それは「天心先生の霊を慰むべき、唯一の道」だと主張している。古田亮氏は、大観が信条とした理想主義の源は岡倉の思想であった、と述べ、岡倉が推進した日本画革新の美術運動が「同時代の社会の理想を代表するような

『国民芸術の創造』」であったとするならば、その発想は「『彩管報国』こそが画家の使命と考えた」昭和期の大観に通じていると指摘する。[6]「彩管報国」とは、絵筆で国に報いることであるが、この講演録においては「芸術報国」の語句と照応する。こうして、大観が自らの信条の拠り所とした「天心先生」の芸術思想は、「報国」の精神と結合していったのである。

昭和一〇年代は、時局を正当化する「先覚者」として、岡倉の思想やことばが読み替えられていった時期であった。そのもっとも代表的なものが、大観が繰り返し使用した「亜細亜は一なり」、すなわち岡倉の著書 *The Ideals of the East with Special Reference to the Art of Japan*（邦題『東洋の理想』）の冒頭の言葉 "Asia is one." の邦訳である。講演の翌日、東京日日新聞は、「アジヤの先覚を讃ふ　岡倉天心を偲ぶ講演会」と題して、以下の記事を掲載した。

「アジヤは一なり」と喝破した明治の先覚者天心岡倉覚三逝いて三十年、その業績を讃へる「岡倉天心遺績顕彰講演会」が日本美術院、岡倉天心遺績顕彰会、本社共催で五日午後六時から一ツ橋共立講堂で催された、横山大観伯登壇

明治の初期において危殆に瀕した東洋美術を復興させたのは全く先生の力である。欧化思想の浸潤したわが芸、学界に先生の思想を活かすことが急務だ

と述べ続いて田村剛博士の「天心先生の風景観」、織田正信氏の「天心先生と一英文学徒」脇本楽之軒氏の「天心先生を憶ふ」と題する講演、今井慶松社中による天心作詞の「前期日本美術院の歌」「松虫」などの俚謡を発表、本社製作映画「スマトラ風土記」「蘭印探訪記」の映写があって九時過ぎ盛況裡に閉会した。[7]

大観の講演録は、翌一一月には常体の文体に改稿されて『現代』に掲載され、その内容が周知されることとなった。[8]さらに同時期（一一月八日）、遺績顕彰会は、茨城県大津町五浦の岡倉旧宅において「亜細亜ハ一な里」と刻まれた記念碑を建立し、除幕式を行った。石碑の文字は、大観が揮毫したものである。

このような遺績顕彰会の事業の背景には、日中戦争勃発以降、「亜細亜は一なり」が大東亜共栄圏建設の思想と結びつけられて称揚され、アジアの盟主たる日本の将来像を予見した「天心」を賛美する風潮があった。

戦時中、岡倉を大東亜共栄圏の「先覚者」として担ぎ上げたのは、主として保田與重郎、浅野晃などの「日本浪曼派」系統の文学者であった。彼らは、岡倉の「亜細亜は一なり」の解釈をめぐって相互に「天心」論を展開した。[9]しかし、木下長宏氏が指摘したように、*The Ideals of the East* の書名は「東方世界の諸理想、複数の理想を指している。決して、アジアの理想の代表としての日本を指していない」のであり、"Asia is one." の「一句が岡倉天心の思想の核心であるという考えは、昭和一〇年代に岡倉をあげつらった人々が打ち出したこと」であったといえる。[10]

このように考えれば、「『亜細亜は一なり』と喝破し、特に日本の燦爛たる古代文化的理想につき万丈の気を吐」いた「大先覚の愛国指導者としての「天心先生」を喧伝した大観もまた、たとえその発言の根

底に岡倉への崇敬の念があったとしても、結果的には、戦後「大アジア主義者」、「国粋主義者」と見做されることとなる「岡倉天心」像を形成した一人に数えざるを得ない。この講演録は、その具体的な例証のひとつと言えるだろう。

（附記）

本資料の掲載をご快諾くださった吉成英文氏、仲介の労をおかけした秋山高志氏、資料の調査にご協力くださった横山大観記念館横山隆氏、佐藤志乃氏、池田博子氏、東京国立博物館植田彩芳子氏、筑波書店高野哲夫氏に感謝を申し上げます。

註

（1）『筑波書店古書目録』第六一号、筑波書店、一九九六年、六頁。川村純義（一八三六～一九〇四、海軍軍人、枢密顧問官）は明治一五年（一八八二）設立した共同射的会社の発起人の一人。

（2）「共同射的場開場」、『東京朝日新聞』、明治二二年七月二日号、第一面。

（3）岡倉一雄『父岡倉天心』、中央公論社、一九七一年、一五六～一五八頁。

（4）昭和一七年一〇月五日は、東京美術学校興亜部でも、岡倉の三〇年忌に際して、同校校内の「岡倉天心像」前に参集し、「天心祭」を挙行、講演等を行った（「美術界彙報」、美術研究所編『日本美術年鑑　昭和一八年』、国書刊行会、一九九六年、七頁）。

（5）大熊敏之「昭和期アカデミズム日本画の確立―一九二〇～四〇年代の横山大観」、宮内庁三の丸尚蔵館編『横山大観の時代 1920s―40s』、宮内庁、一九九七年、四二～四四頁。

（6）古田亮「生涯の指針となった岡倉天心の理想主義」、『別冊太陽　気魄の人横山大観』、平凡社、二〇〇六年、一五頁。

（7）「アジヤの先覚を讃ふ　岡倉天心を偲ぶ講演会」、『東京日日新聞』、昭和一七年一〇月六日号、第二面。

（8）横山大観「天心岡倉先生」、『現代』第二三巻一一号、第日本雄弁会講談社、一九四二年、一三〇～一三二頁。本資料と『現代』掲載の文面との間には、文体や題名の変更のほかに、句点の位置、漢字をひらがなに改めるなどの相違が認められる。

（9）「日本浪曼派」系統の文学者による「天心論」の最近の研究は、李京僖「保田與重郎の岡倉天心論―三つの架橋の相―」（『比較文学』第四九巻、日本比較文学会、二〇〇七年、五二～六六頁）、及び「淺野晃の岡倉天心論―『日本浪曼派の周辺者』による批評―」（『比較文學研究』第九二号、東大比較文學會、二〇〇八年、八二～一〇三頁）がある。

（10）木下長宏『岡倉天心―物ニ観ズレバ竟ニ吾無シ―』、ミネルヴァ書房、二〇〇五年、二四〇～二四五頁。木下氏は、『東洋の理想』という邦題がつけられ「理想」が単数と理解されたことによって、“Asia is one.”の句から「東洋の理想は一つである」という想念が生まれ、大東亜共栄圏の思想と合体させられた、と指摘する。

〔しみず　えみこ／本学非常勤講師・客員所員〕